

俳句

大津俳句会

翳^{かげ}りても光を蔵す竜の玉

井芹眞一郎

合掌の指の先まで淑氣満つ

秋山 恵

勢揃実家で過す三ヶ日

大塚喜久子

正月の到着口ビー笑顔どち

佐賀 久子

病院食七草粥の添へられし

松尾 昭雅

笹子来て古刹の庭の黙を解き

岡崎 浩子

小春日や乗せれば眠るべビーカー

佐澤 俊子

俳句

つのはな句会

袖通す母の手編みのカーデガン

水野 春子

さごんかの赤を濃くする今朝の雨

梅木トキエ

吾子逝きて無限の想い残す冬

塚本 洋子

生命線見えざるものの冴ゆる夜

榮田しのぶ

残照の半島に灯り 春兆す

志賀 孝子

反省や希望重ねて去年今年

田上 公代

黙食に馴れて寒夜の鍋つつく

木庭 杏子

文庫手に少年春へケンケンパー

上杉 波

書き初めや非戦非核の墨を足す

矢嶋 道子

短歌

大津短歌会

ゆるゆると渦巻きながら水ながる上井手の土手秋桜揺るる

鞍 岳志

久々に見る名月に真綿雲よりそい照す姿優しき

管野 静

蜜蜂の団子となりてその中にスズメ蜂の尻少し見ゆ

坂本 杲子

山門を真つ赤に覆うかえでの大樹^きライトアップは赤を極める

豊岡ミツル

この手もて吾子^{いこ}扱めたる母なると小さき記事あり古き新聞

吉永 恵子

大熊は見事に鯉を生け捕りぬ見張りの飼主声さえ出じ

小平 善行